126.折衝飲

参考文献名		牡丹皮	川芎	芍薬	桂枝	桃仁	当帰	延胡索	牛膝	紅花
処方分量集		3	3	3	3	5	5	2	2	1
診療の実際		3	3	3	3	5	5	2	2	1
診療医典	注1	3	3	3	3	5	5	2	2	1
症候別治療		3	3	3	3	4	4	2	2	1
処方解説	注2	3	3	3	3	5	5	2.5	2.5	1.5
応用の実際	注3	3	3	3	3	4	4	2	2	1
明解処方		3	3	3	3	4	4	2	2	1
診断と治療		3	3	3	3	5	5	2	2	1

注1 亜急性または慢性に移行し，下腹部に抵抗圧痛があり，ときどき自発痛があって帯下を伴うものによい。附属器炎の長びいたものに用いることが多い。

注2 瘀血により，下腹部に痛みを訴え，また骨盤腔内に痛みを発するものに用いる。妊娠初期の出血，また妊娠中でなくとも，婦人の瘀血による諸症，月経不順などに痛みをともなうものに用いてよい。

注3 婦人の瘀血に用いる。瘀血の腹証があり，子宮出血，下腹痛，腰痛，産後悪露の止まらぬものなどに用いる。患者は虚実中等度以上で，体力の充実度が中ぐらいあるいはそれ以上の場合である。

処方番号：127　　**処方名**：洗肝明目湯（せんかんめいもくとう）

処方構成：
当帰 1.5、川芎 1.5、芍薬 1.5、地黄 1.5、黄芩 1.5、山梔子 1.5、連翹 1.5、防風 1.5、決明子 1.5、黄連 1-1.5、荊芥 1-1.5、薄荷 1-1.5、羌活 1-1.5、蔓荊子 1-1.5、菊花 1-1.5、桔梗 1-1.5、疾梨子 1-1.5、甘草 1-1.5、石膏 1.5-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度のものの次の諸症

効能・効果：
目の充血、目の痛み、目の乾燥（ドライアイ）、角膜・結膜の炎症

原典：万病回春
出典：

解説：
原典の『万病回春・眼目篇』に「一切の風熱、赤く腫れ疼痛する者を治す。」と主治が記載されている。体力中等度とあるが体力には余り拘らなくても良い。ただ眼の症状は実熱症状で発赤疼痛が強い。角膜・結膜の発赤・炎症・疼痛そして乾燥を目標にする。高齢者の場合は強い炎症状態を認めなくてもドライアイがあれば効果が期待出来る。

角膜・結膜の急性炎症にも適用可能であるが、急性炎症の初期には謝導人大黄湯、越婢加朮湯、明朗飲加菊花などを用いる機会が多く洗肝明目湯は慢性化した目の炎症と乾燥、疼痛に用いる。ベーチェット病の眼症状で目の乾燥・疼痛を認めるときにも適用可能である。

127.洗肝明目湯

参考文献名	当帰	川芎	芍薬	地黄	黄連	黄芩	山梔子	石膏	連翹	防風	荊芥	薄荷	羌活	蔓梨子	決明子	桔梗	甘草	用法・用量
漢方診療医典	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	
臨床応用処方解説　注1	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	
漢方後世要方解説　注2	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	
経験・漢方処方分量集	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	
現代漢方入門	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	
1000万人の漢方診断と治療の実際	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1.5	1.5	3	1	1	1	1	1	1	1.5	1	1	

注1
千葉大眼科においては本方の加減方を角膜疾患に用いた臨床研究がある。

注2
防風、羌活、黄連、黄芩等は眼部の充血、腫脹、疼痛には不可欠のものとされ、更に当帰、山梔、連翹、川芎、地黄等もこれを補助する。

処方番号：128　　**処方名**：川芎茶調散（せんきゅうちゃちょうさん）

処方構成：

白芷 2、羌活 2、荊芥 2、防風 2、薄荷葉 2、甘草 1.5、細茶 1.5、川芎 3、香附子 4

用法・用量：

湯

しばり：

体力に関わらず、頭痛があるものの次の諸症

効能・効果：

かぜ、血の道症、頭痛

原典：太平恵民和剤局方

出典：

解説：

古方ではあまり使用しない処方であるが、後世方では婦人の常習頭痛によく用いられる。

128.川芎茶調散

参考文献名		白芷	羌活	荊芥	防風	薄荷	甘草	細茶	川芎	香附子	生姜	葱
処方分量集		2	2	2	2	2	1.5	1.5	3	3	−	−
診療の実際	注1	2	2	2	2	2	1.5	1.5	3	4	−	−
診療医典		2	2	2	2	2	1.5	1.5	3	4	−	−
症候別治療		2	2	2	2	2	1.5	1.5	3	4	3	4
処方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
応用の実際		2	2	2	2	2	1.5	1.5	3	3	−	−
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

注1 頭痛，神経痛（三叉神経痛）

処方番号：129　　**処方名**：千金鶏鳴散（せんきんけいめいさん）

処方構成：
大黄 2、当帰 5、桃仁 5

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず広く応用される。

効能・効果：
打撲のはれと痛み

原典：丹渓心法
出典：

解説：
　単に鶏鳴散ともいうが、他に同名異方があるので区別するため千金鶏鳴散としたものと考えられる。打撲や捻挫などによるはれとひどい痛みに内服する。酒で煎じる方がよい。

129.千金鶏鳴散

参考文献名		大黄	桃仁	当帰	杏仁
三因方	注1	1両			37粒
千金方　巻二十五備急	注2	2分		2分	
外台秘用　中巻	注3	1分		2分	
中国大辞典	注4	1両	27枚		
		－	－	3銭	
		－			－
診療医典	注5	2	5	5	
症候別治療	注6	1	4	4	
明解処方	注7	－	－	－	
処方分量集		2	5	5	
中国概論	注8	1両	3銭	5銭*1	

*1　帰尾

注1　鶏鳴散，右研細，酒一碗至六分，碗裂去滓鶏鳴時服，次日取下，瘀血即愈，若便覚気絶不能言，取薬不及，急擘口開，以熱小便灌之。

注2　治従高堕下崩中方，右二味治下節，酒服方寸匕，日三。

注3　又療従高堕下瀉血，及女人崩中方，右二味擣為散，酒服方寸匕，日三，范王同並出第二十六巻中。

注4　三因極一病証方：治跌打損傷，血瘀凝積，気絶欲死，煩躁頭痛。研細，清酒一碗，煎至六分，去滓，鶏鳴時服，次日取下瘀血，即愈，若便覚気絶，不能言語，取薬不及，急撬口開，用熱童便灌之，即愈。

注5　鶏鳴散(千金方)本方は打撲後の腫れと痛みの激しいものに用いるとよく奏効する。打撲直後の場合によい。

注6　この方は大黄，杏仁の2味からできていて，三因方には種々の損傷で瘀血がとどこおりあつまって，こらえにくいほどに痛むものを治するという。この方は元来，粉末にして酒でのむことになっているが，酒でせんじてのんでもよい。

注7　千金方に同名異方の鶏鳴散があるが，これは大黄，当帰，桃仁の3味からなる打撲傷の薬で，全く違った処方であるから混同しないように願いたい〔鶏鳴散加茯苓(時方歌括)の項〕。

注8　三因極一病証方論：酒で煎じ，鶏鳴時に服用すれば，天明に至って瘀血を下すことができる。

処方番号：130　　**処方名**：千金内托散（せんきんないたくさん）

処方構成：
黄耆 2、当帰 3-4、人参 2-3、川芎 2、防風 2、桔梗 2、白芷 1-2、厚朴 2-3、甘草 1-2、桂枝 2-4
（金銀花 2 を加えても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、患部が化膿するものの次の諸症

効能・効果：
化膿性皮膚疾患の初期、痔、とこずれ

原典：万病回春
出典：

解説：
『万病回春』（癰疽門）に、「癰疽瘡瘤ヲ治ス。未ダ成ラザルモノハ速ヤカニ散ジ、已ニ成ルモノハ速ヤカニ潰敗シ、膿自ラ出ズ。手擠（手をもって除去する手術のこと）ヲ用フルことなく悪肉自ラ去ル。…」とある。化膿症で虚状を呈し、体力虚耗の傾向にあるものに体力をつけて治癒機転を促進させる。千金内托散より少し熱状のあるものには托裏消毒散、千金内托散よりさらに虚状の強いものには帰耆建中湯を用いる。

130.千金内托散

参考文献名		黄耆	当帰	人参	川芎	防風	桔梗	白芷	厚朴	甘草	桂枝	金銀花	用法・用量
漢方診療医典	注1	2	3	2.5	2	2	2	1	2	1	2		
漢方処方応用の実際	注2	2	3	3	2	2	2	1	2	1	2		
臨床応用漢方処方解説	注3	2	3	3	2	2	2	1	2	1	2		
症候による漢方治療の実際		2	3	2.5	2	2	2	1	2	1	2		
漢方治療百話第一集		2	3	2.5	2	2	2	3	2	1	2	2	
経験・漢方処方分量集		2	3	2.5	2	2	2	1	2	1	2		
改訂新版漢方処方集		2	4	2	2	2	2	2	3	2	4		
漢方入門講座(1)		2	3	2.5	2	2	2	1	2	1	2		

注1

本方中の人参、当帰、川芎、白芷などは滋養剤で、醸膿、新肉の成長を助ける。桂枝と黄耆は病毒を体表に導いて内攻を防ぎ、異常の滋養剤の薬効を増進させる。桔梗、防風は解毒消炎的に働く。厚朴は他の諸薬が若干胃に停滞して食欲を害する恐れがあるので、この場合は健胃剤として加味されているものと考える。甘草は諸薬の調和剤であって、諸薬の偏した性質が甘草によって、それぞれ調和されて渾然たる一方剤となって所期の効を奏するのである。加味方としては反鼻がしばしば用いられる。反鼻は醸膿の力が薄弱な場合に加えられる。

注2

本方の適応症は、亜急性期の化膿性炎症で、体質的には虚証に属し、虚弱で体力低下の傾向のものである。托裏消毒散が、急性期で、やや実証なのと対照的なものである。そこで、本方は虚証を補って排膿、肉芽新生を促す効があり、膿生成の力が弱く発散しにくいときは反鼻を加えるとよい。更に慢性化して経過の長びいたものには、補中益気湯や十全大補湯がよい。

注3

方中の黄耆・人参・桂枝・川芎・防風等はよく協力して皮膚に活力をつける。当帰は新血を生じ、虚を補い、諸瘡瘍に用いて新肉芽の発生を促し、厚朴は停滞している気と水をよくめぐらし、白芷には排膿作用がある。

処方番号：131　　**処方名**：喘四君子湯（ぜんしくんしとう）

処方構成：
人参 2-3、白朮 2-4、茯苓 2-4、陳皮 2-4、厚朴 2、縮砂 1-2、蘇子 2、沈香 1-1.5、桑白皮 1.5-2、当帰 2-4、木香 1、甘草 1-3、生姜 1、大棗 2　（生姜、大棗なくても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で胃腸の弱いものの次の諸症

効能・効果：
喘息、気管支喘息、息切れ

原典：万病回春
出典：

解説：
消化器の虚弱な人の漢方薬である四君子湯を呼吸器系に使うようにかえたものである。やせ型で胃内停水（胃に水がたまった感じ）があり、胃腸虚弱で胃下垂や胃アトニーの甚だしい人が喘息発作により呼吸が促拍（短気）するものに用いられる。漢方の基礎理論の一つである五行説では、肺（金行）を強くするためには、その親にあたる消化器（脾・土行）を強くすると言う考えがある。この処方はまさに、消化器を強くすることで肺を強くすると言う考えから出来ている処方である。
肺気腫などが進行して、気力体力ともに極度に衰え、喘咳・呼吸促拍が激しい時に使われる。喘息に使われる処方の中では最も体力が無い人に使う処方の一つである。
『勿誤方函口訣』では「その人胃虚して、時々喘鳴を発するものによし、熱無く短気が主なり。もし熱あれば、一旦麻杏甘石の類を用いて解熱すべし……」と書かれている。
尚、原典の『万病回春』には喘急門に「四君子湯」の処方名で記載されている。
（『漢方処方応用の実際』（山田光胤著）を参考とした）

131.喘四君子湯

参考文献名	人参	白朮	朮	茯苓	陳皮	厚朴	縮砂	蘇子	沈香	桑白皮	当帰	木香	甘草	生姜	大棗	用法・用量
漢方診療医典	2	−	4	4	2	2	1	2	1	1.5	4	1	1			
漢方処方応用の実際 注1	2	−	2	2	2	2	1	2	1	1.5	2	1	1			
臨床応用漢方処方解説 注2	2	−	2	2	2	2	1	2	1	1.5	2	1	1			
新版漢方医学	2	−	4	4	2	2	1	2	1	1.5	4	1	1			
症候による漢方治療の実際 注3	2	−	2	2	2	2	1	2	1	1.5	2	1	1			
経験・漢方処方分量集	2	−	4	4	2	2	1	2	1	1.5	4	1	1			
改訂新版漢方処方集	3	4	−	2	2	2	2	2	1.5	2	2.5	1.5	3	1	2	
現代漢方入門 注4	2	−	4	4	2	2	1	2	1	1.5	4	1	1			
1000万人の漢方診断と治療の実際	2	−	4	4	2	2	1	2	1	1.5	4	1	1			

注1
胃腸虚弱で、胃下垂があったり胃アトニー症のひどい人が、喘息発作をおこして呼吸が苦しくなるものに用いる。

注2
胃腸虚弱者の喘鳴と呼吸困難の激しいときに用いる。他の薬方が胃にもたれて受けつけないというとき、肺結核の末期・肺水腫・気管支喘息・気管支拡張症などで胃腸障害をともない症状激しいときに用いる。

注3
肺結核で病勢進行し、体力衰え、喘咳と呼吸困難がひどくて苦しむものに用いる。

注4
虚証の胃腸の弱い冷え症の体質に長期間服用して効果的である。

処方番号：132　　**処方名**：銭氏白朮散（ぜんしびゃくじゅつさん）

処方構成：
白朮 4、茯苓 4、葛根 4、人参 3、藿香 1、木香 1、甘草 1

用法・用量：
湯
小児の消化不良の効能については小児用量に注意のこと。

しばり：
体力虚弱で、嘔吐や下痢があり、ときに口渇や発熱があるものの次の諸症

効能・効果：
感冒時の嘔吐・下痢、小児の消化不良

原典：小児薬証直訣
出典：

解説：
脾虚を補い胃腸の力をつける四君子湯に葛根、藿香、木香を加えたもので、脾虚し体液が消耗したものに使用する。五苓散は胃内停水があって渇し嘔吐をおこすものであるが、本方は津液が渇いて渇を発し嘔吐するものに用いる。

132.銭氏白朮散

参考文献名		朮	白朮	オケラ	茯苓	葛根	人参	木香	藿香	甘草	用法・用量
処方分量集		4	−	−	4	4	3	1	1	1	
診療の実際	注1	4	−	−	4	4	3	1	1	1	
診療医典	注2	4	−	−	4	4	3	1	1	1	
症候別治療		4	−	−	4	4	4	1	1	1	
処方解説	注3	−	4	−	4	4	3	1	1	1	
後世要方解説	注4	−	2	−	2	2	2	0.8	0.8	0.8	*
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
応用の実際		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
明解処方		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方あれこれ		−	−	4	4	4	3	1	1	1	

＊ 5歳児以下小児1日の量

注1　小児の消化不良症で微熱のあるもの。感冒により吐瀉を起こしたもの。食物がなんでも甘く覚えるもの等に応用される。

注2　平素から胃腸の弱い幼児にみられる水瀉性の下痢に用いる。嘔吐を兼ねるものにも，発熱のあるものに用いてもよい。

注3　胃腸虚弱の小児が吐瀉して津液渇き，発熱口渇を起こしたものに用いる。小児消化不良症，感冒に吐瀉を兼ねたもの。糖尿病でなにを食べても甘く感じるものなどに応用される。

注4　小児消化不良症，感冒吐瀉を兼ねたもの，糖尿病の一症，食偏に甘く覚えるもの。

参考：万病回春に，吐瀉，あるいは病津液たらず，口乾渇を作し，胃を和し，津を生じ，瀉利を止む。将に慢驚風とならんで欲するものを治す。

処方番号：133　　**処方名**：続命湯（ぞくめいとう）

処方構成：
麻黄 3、桂枝 3、当帰 3、人参 3、石膏 3-6、乾姜 2-3、甘草 2-3、川芎 1.5-3、杏仁 2-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：
しびれ、筋力低下、言葉のもつれ、高血圧に伴う症状（めまい・耳鳴り・頭痛・頭重・肩こり、頭部圧迫感）、気管支炎、気管支喘息、神経痛、関節痛、頭痛、むくみ

原典：金匱要略
出典：

解説：
出典である『金匱要略』には「中風痞（ひ）にて、身体自ら収むる能わず、口言う能わず、冒昧痛む処を知らず、或いは拘急して転側するを得ざるを治す」と記されている。中風とは脳血管障害による麻痺のことである。陽証で実証の方剤であり、脳血管障害（後遺症）に用いられるが、『漢方処方解説』には関節炎や顔面神経麻痺の症例も記されており、臨床上参考となる記述である。
なお、本方は陽証・実証のものが適応となるが、陰証・虚証の脳血管障害後遺症には小続命湯を用いると良い。

133.続命湯

参考文献名		麻黄	桂枝	当帰	人参	石膏	乾姜	甘草	川芎	杏仁	用法・用量
漢方診療医典		3	3	3	3	6	2	2	2	4	
漢方処方応用の実際	注1	3	3	3	3	6	2	2	2	4	
臨床応用漢方処方解説	注2	3	3	3	3	6	2	2	2	4	
新版漢方医学		3	3	3	3	6	2	2	2	4	
症候による漢方治療の実際	注3	3	3	3	3	6	2	2	2	4	
経験・漢方処方分量集		3	3	3	3	6	2	2	2	4	
改訂新版漢方処方分量集		3	3	3	3	3	3	3	3	2.5	*1
漢方と民間薬百科		3	3	3	3	6	2	2	2	4	
増版改訂漢方入門講座上・下		3	3	3	3	3	3	3	1.5	3	
漢方入門講座(1)		3	3	3	3	3	3	3	1.5	3	
新撰類聚方	外台用	3両	3両	3両	3両	3両	3両	3両	1両	40枚	*2
新撰類聚方	千金用	3両	3両	3両	3両	3両	3両	3両	3両	40枚	*2
漢方薬入門		3	3	3	3	6	2	2	2	4	
現代漢方入門		3	3	3	3	5	2	2	2	4	
成人病の漢方療法		3	3	3	3	5	2	2	2	4	
漢方の診かた治しかた		3	3	3	3	5	2	2	2	4	
1000万人の漢方診断と治療の実際		3	3	3	3	5	2	2	2	4	

*1　水400を以って煮て160に煮つめ4回に分服
*2　原方は4回分であることに注意

注1
本方は金匱要略の中風歴節病編の処方で、大青竜湯の生姜を乾姜に代え、大棗に代りに人参、当帰、川芎を入れたものである。したがって主剤は麻黄であって、本来喘咳、咳嗽、浮腫などが正面の目標になる。

注2
本方は大青竜湯の生姜のかわりに乾姜を用い、大棗のかわりに当帰、人参、川芎のような強壮・補血・滋潤の効のある薬物を加えている。

注3
続命湯という処方は千金方に始めてあげられて、しかも同名異方、同方異名のものがあって、混乱を起しやすい。

処方番号：133A　　**処方名**：小続命湯（しょうぞくめいとう）

処方構成：
麻黄 2-4、防已 2-3、人参 1-3、黄芩 2-3、桂枝 2-4、甘草 1-4、芍薬 2-3、川芎 2-3、杏仁 3-4、加工ブシ 0.3-1、防風 2-4、生姜 1-2（ヒネショウガを使用する場合 4）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下のものの次の諸症

効能・効果：
しびれ、筋力低下、言葉のもつれ、気管支喘息、気管支炎

原典：千金要方
出典：

解説：
続命湯の解説を参照せよ。

133A.小続命湯

参考文献名	麻黄	防已	人参	黄芩	桂枝	甘草	芍薬	川芎	杏仁	附子	炮附子	白川附子	防風	生姜	乾姜	用法・用量
漢方処方応用に実際　注1	2	2	1	2	2	1	2	2	3	0.3	−		2	1	−	
金匱要略入門	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	−	1枚	−		1両半	5両		
症候による漢方治療の実際	3	2	2	2	3	3	2	2	−	0.6	−		2	4		
漢方治療百話第二集	3	3	3	3	3	2	3	3	3	0.5	−		4			
経験・漢方処方分量集	2	2	1	2	2	1	2	2	3.5	0.6	−		2	2	(1)	
改訂新版漢方処方分量集	4	2	2	2	4	4	2	2	−	−	2	(2)	3	10		*1
漢方薬入門	2	2	1	2	2		2	2	3.5	0.5〜1			2	1		
明解漢方処方集　注2	3	2	2	2	3	3	2	2	3	0.6			2	2		

*1生姜は必ずヒネ生姜

注1
続命湯(大続命湯)の用い方に準じて、体力が衰え虚状を呈する人に用いる。

注2
本方の薬能は麻黄、桂枝、防風の発表作用と川芎、芍薬、附子などの裏に働く温薬を組合せたもので、専ら表裏の水毒を排除することにある。

処方番号：134　　**処方名**：疎経活血湯（そけいかっけつとう）

処方構成：
当帰 2、地黄 2、川芎 2、蒼朮 2（白朮も可）、茯苓 2、桃仁 2、芍薬 2.5、牛膝 1.5、威霊仙 1.5、防已 1.5、羌活 1.5、防風 1.5、龍胆 1.5、生姜 0.5、陳皮 1.5、白芷 1-1.5、甘草 1

用法・用量：
湯

しぱり：
体力中等度で痛みがあり、ときにしびれがあるものの次の諸症

効能・効果：
関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛

原典：万病回春
出典：

解説：
本方は四物湯の加味方である。すなわち、当帰、芍薬、川芎、地黄、桃仁は、四物湯加桃仁で、下腹部の滞血をめぐらし、茯苓、蒼朮、陳皮、羌活、白芷などは、威霊仙、防已、竜胆とともに腰部の風と湿を去る。牛膝は特に湿を除き、腰脚の疼痛を治す働きがある。
すなわち本方は、平素酒をよく飲むものや、瘀血のあるものなどの、上、下肢痛あるいは半身の痛を治すに用いる。

134.疎経活血湯

参考文献名		当帰	地黄	乾地黄	白朮	蒼朮	朮	川芎	桃仁	茯苓	芍薬	牛膝
診療医典	注1	2	2	−	−	−	2	2	2	2	2.5	1.5
治療の実際	注2	2	2	−	−	−	2	2	2	2	2.5	1.5
処方解説	注3	2	2	−	−	2	−	2	2	2	2.5	1.5
応用の実際	注4	2	2	−	−	−	2	2	2	2	2.5	1.5
漢方処方集		3.5	−	3	3	−	−	2.5	3	1	4.5	3
処方分量集		2	2	−	−	−	2	2	2	2	2.5	1.5

参考文献名		威霊仙	防已	羌活	防風	竜胆	生姜	乾姜	陳皮	白芷	甘草
診療医典	注1	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	1.5	1	1
治療の実際	注2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	1.5	1	1
処方解説	注3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	1	1.5	1.5	1
応用の実際	注4	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	1.5	1	1
漢方処方集		3	2.5	2.5	2.5	2.5	−	1	3	2.5	1
処方分量集		1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	1.5	1.5	1	1

注1　本方は筋肉リウマチ，痛風，漿液性膝関節炎，腰痛，坐骨神経痛，下肢麻痺，脚気，浮腫，半身不随，高血圧症，産後の血栓疼痛などに応用される。長期のリウマチ性紫斑病の婦人によく効く。

注2　飲酒を過ごし，あるいは性生活の過多などによって，体力衰え，疼痛がからだじゅう走りまわり，その痛みが夜間にはなはだしいものの神経痛，坐骨神経痛。

注3　産後の下腫痛，下肢の麻痺，右膝の関節痛と全身筋肉痛。

注4　上下肢の神経痛，痛風，脳卒中後遺症など。

処方番号：135　　**処方名**：蘇子降気湯（そしこうきとう）

処方構成：
紫蘇子 3（蘇葉可）、半夏 4、陳皮 2.5、前胡 2.5、桂枝 2.5、当帰 2.5、厚朴 2.5、大棗 1-1.5、生姜 0.5-1 又は乾姜 0.5-1、甘草 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、足冷えや顔ののぼせがあり、息苦しさのあるものの次の諸症

効能・効果：
慢性気管支炎、気管支ぜんそく

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
中焦の虚しやすい虚弱体質者の方、に瘀血の症状が加わった当帰建中湯から芍薬を去り、気の鬱滞に用いられる半夏厚朴湯から茯苓を去ったものを合方したような薬方で、高齢者の冷えのぼせによる咳嗽に用いられるが、また平素体質虚弱な人で気力に乏しく、足腰が冷えて顔はのぼせ、耳鳴、衄血、充血眼、等のぼせ症状があったり、痰が多く、咳が出て呼吸が苦しいものに用いる。
類似薬方に蘇子、厚朴、半夏、柴胡、甘草、当帰、橘皮、桂枝の八味に杏仁、桑白を加味し、足冷喘息に用う紫蘇湯（千金）があり、また、蘇子、干姜、橘皮、茯苓、半夏、桂枝、人参、甘草の八味からなり虚気上逆喘に用う蘇子湯（外臺）がある。